目標持って進む大切さ

ノーベル医学生理学賞受賞者で京都大iPS細胞研究所長の山中伸弥さん(52)＝神戸大医学部出身＝の講演会が、西宮市の兵庫県立芸術文化センターで開かれた。テーマは「未来を担う子どもたちへ」。山中さんは中高生ら約2千人に対し、自身の挫折体験などを披露しながら、研究の歩みや目標に向かって進むことの大切さを話した。

（金井恒幸）

iPS開発の山中伸弥氏 中高生ら対象に講演

昨年11月に亡くなった前知事の貝原俊民さんをしのび、建築家の安藤忠雄さんが語る講演会シリーズ（神戸新聞社など主催）の特別編として、今月21日に開かれた。

山中さんはあらゆる組織になれる人工多能性幹細胞（iPS細胞）を開発し、2012年にノーベル賞を受賞。昨年9月に神戸で実施されたiPS細胞を使った世界初の移植手術に技術協力した。

講演する山中伸弥所長＝県立芸術文化センター

10代での経験から医学を志す

■原点

講演で山中さんは、高校生のころ、肝硬変になった父親から「医者になれ」と勧められたことや、中学から大学12年まで柔道をしていて骨折が多く、そのたびに整形外科を受診して「自分も整形外科医になりたい」と考えたことなど、医学を志した原点に触れた。

続いて、2度の挫折体験をユーモアたっぷりに紹介し、中高生らの笑いを誘った。

1度目の挫折は「研修医時代、指導者に毎日怒鳴られ、『じゃまなか』と呼ばれた」というエピソード。研修医1年目、父親が肝硬変の悪化で亡くなり、「一緒に酒を飲み、社会人として助けてほしかったのに」とショックを受けた。

さらに、脊髄損傷のように当時の治療では治らない患者がいるのを見て「無力感を抱き、自信をなくした」。

悩むうちに考え方が変わる。「今治せない患者を将来治すには研究の道がある」。大阪市立大の大学院に入り直した。

２度の挫折経て新たな気づき

■万能細胞

1993年に米国へ留学。身近にノーベル賞級の優秀な研究者がたくさんいる環境で刺激を受け、さまざまな組織になるマウスの胚性幹細胞（ES細胞）と出合った。96年に帰国後も研究を続けたが、米国と比べてES細胞研究の環境が整っておらず、実験に使うマウスの世話に明け暮れる日々が続いた。

自ら「アメリカ帰国後うつ病」と名付けるような状態で、「整形外科医になった方がいいのか」とさえ思った。これが「第2の挫折」という。

だが、98年に米国の研究者がヒトのES細胞を開発。「人間を治せるかも」と意欲が戻った。ES細胞は受精卵を壊して作るため倫理面から反対する意見があり、新たな万能細胞を探すことにした。

iPS細胞を開発したのは、マウスで2006年、ヒトでは07年。特定の遺伝子を入れて、一度変化した細胞を受精卵のような万能細胞に戻す、生物学の常識を覆す成果だった。「iPS細胞を医療応用するのが使命」と意気込む一方、「研究所の研究者の雇用を守ることも含め、研究の土台づくりのため、マラソンを走って寄付を集めてます」とユーモアも忘れない。

最後に「自分の見つけたビジョンと働く内容が一致すれば幸せで、生きがいにつながる」と強調。「調子のいいときは悪いことの前兆、悪いときはいいことの前兆ととらえ、一喜一憂しない。いいことがあったら、周囲へ感謝を示すことを忘れないで」と締めくくり、会場から大きな拍手を受けた。

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。

氏名[　　]

NIEワークシート／中学校～高校

① 山中伸弥さんは、1度目の挫折を体験した後、考え方がどのように変わったのですか？25字以内で書きなさい。

② 山中伸弥さんが強調されたことは、どんなことですか？35字以内で書きなさい。

③ 記事を読んだ感想を書きましょう。